

『紫式部日記』の〈夢〉を用いた比喩表現

——物語作者〈紫式部〉との関わりから——

加藤直志

はじめに

前近代、とりわけ古代の〈夢〉については、西郷信綱^①、河東仁^②、倉本一宏^③などをはじめとして、多くの先行研究がある。しかしながら、文学テクストにおける、〈夢〉を用いた比喩表現については、それが光源氏と藤壺の密通場面などといった、極めて重要な文脈で用いられているにも関わらず、さほど多くの研究がなされてきたとは言いがたい^④。

本稿では、『紫式部日記』における、〈夢〉を用いた比喩表現の持つ意味について論じる。『紫式部日記』には、作者自身が、自己の存在感覚の形容として〈夢〉を用いている箇所がある。詳細は後述するが、管見の限り、このような用法は『紫式部日記』及び『源氏物語』以前には発見できず、その意味で物語作者〈紫式部〉に特有

の使用法であるということが指摘できる。

『紫式部日記』の研究史は、『源氏物語』の執筆事情への関心や平安時代の史料的价值を重視するものから、『源氏物語』の作者としての紫式部への関心を経て、『紫式部日記』自体を研究対象とするものへと推移し、近年では再び『源氏物語』の作者としての紫式部の日記という捉え方を重視する論考も見られるようになってきている^⑤。戦後のテクスト論の隆盛により、『紫式部日記』『紫式部集』と『源氏物語』とを結びつけて論じることが避けられてきたきらいもあるが、その一方で、これらが同一人物によって書かれたという事実は我々の前に厳然として存在している。そもそも、千年以上前に書かれた物語の作者が明らかで、その日記が現在まで伝わっているということ自体（日記というものの概念が現代と異なるにせよ）、人類史的に見ても極めて希なことである。このような状況下で、

『紫式部日記』を『源氏物語』との関連で論じる方法を改めて探ることには、大きな意義があると考えられる。本稿では、『紫式部日記』と『源氏物語』だけを比較して論じるという従来の方法ではなく、同時代の他のテキストをも比較対象に加えた。他のテキストに見られない特徴が、『紫式部日記』と『源氏物語』だけに共通して見られた場合、初めて〈紫式部〉に特有の特徴と言い得るはずだからである。なお、本稿における、物語作者〈紫式部〉とは、このような分析方法を取りながら、「複数の人間の書写行為や読みの重なり合いの上に浮かび上がってくる存在^⑦」を指し、歴史上の実在人物としての紫式部とは完全に同一の存在であるとはいえないものと規定して論じる。

一、『紫式部日記』の〈夢〉を用いた比喻表現

寛弘五年十二月二十九日、一旦里下がりにしていた〈紫式部〉が再び宮中に戻った際、初出仕のころを回顧して、次のように書き綴っている。

師走^{しはす}の二十九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵^{こよ}のことぞかし。(ア)いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴^なれにけるも、うとましの身のほどやおぼゆ。

(寛弘五年十二月二十九日／一八四頁)^⑧

傍線部(ア)では、「甚だしくも、夢路に迷い込んでしまったことよ」と、出仕直後の心境を回想している。この場面については、〈紫式部〉が自己の心情を表出させている箇所の一つであり、秋山虔が『式部の「心」と、その「思はずなる」さまになりゆく「うとましの身」とは、果てしもなく葛藤する』と説いたのを初め、多くの先行研究^⑩がある。

ここで用いられている、(ア)「夢路にまどふ」は『紫式部日記』『源氏物語』に一例ずつみられるが、それ以前については、『古今和歌集』などの歌集にしか用例を確認することができず、『紫式部日記』及び『源氏物語』、言い換えれば、〈紫式部〉に特徴的な表現とすることができよう。『紫式部日記』に則して言えば、宮中を「夢路」になぞらえ、自身の苦悩の救済につながるのではないかというわずかな期待と、その「夢路」をすんなりと進んでいくことのできない懊悩を、独特の歌語的表現で回顧していたのであった。

『紫式部日記』には、「夢路にまどふ」以外に、〈夢〉の用例が三例見られ、そのすべてが「夢のやう」という比喻表現で用いられている。以下、順に引用する。

一条天皇の行幸当日、土御門殿では盛大な儀式が催される。『紫式部日記』には、その際の、左衛門内侍と弁の内侍という二人の女房の様子が詳しく描写されている。

内侍二人出づ。その日の髪上げうるはしき姿、唐絵ををかしげにかきたるやうなり。左衛門の内侍、御佩刀とる。(中略)弁の内侍はしるしの御筥。紅に葡萄染の織物の袷、裳、唐衣は、さぎの同じこと。いとささやかにをかしげなる人の、つつましげにすこしつみたるぞ、(イ)心苦しう見えける。扇よりはじめて、好みましたりと見ゆ。領巾は棟綵。(ウ)夢のやうにもこよひのだつほど、よそほひ、むかし天降りけむをとめこの姿も、かくやありけむとまでおぼゆ。

(寛弘五年十月十六日／一五四—一五五頁)

内侍達の髪上げ姿を「唐絵」に喩えた後、傍線部(ウ)では、二人の立ち居振る舞いを「夢のやう」と形容しているが、傍線部(イ)で、内侍達が「心苦しう見える」とも書いており、宮廷生活の華やかさを表しつつも、それに対する〈紫式部〉の醒めた視線を含み持つている。

二例目の「夢のやう」も見てみる。出産を無事に終えた中宮彰子が入裏に戻った後の、寅の日の夜、清涼殿の東廂では五節の舞が舞われ、天皇や中宮も御覧になる。〈紫式部〉は、気分が乗らなかつたものの、殿(道長)に急かされてようやく、参上する。

(エ)もの憂ければ、しばしやすらひて、有様にしたがひてまゐらむと思ひてゐたるに、(中略)殿おはしまして、「などてかう

『紫式部日記』の〈夢〉を用いた比喻表現

て過ぐしてはゐたる。いざ、もろともに」と、せめたてさせたまひて、(オ)心にもあらずまうのほりたり。(カ)舞姫どもの、いかに苦しからむと見ゆるに、尾張の守のぞ、心地あしがりていぬる、夢のやうに見ゆるものかな。ことはてて下りさせたまひぬ。

(寛弘五年十一月二十一日／一七七頁)

ここでも、〈紫式部〉は、傍線部(エ)「もの憂けれ」、(オ)「心にもあらず」と、宮中の華やく様子に同化できないでいる。その醒めた視線は、舞姫の一人が気分を悪くして退出した様子を見逃さない。

この前日に行われた儀式の際にも、「人の上とのみおぼえず」、「胸ふたがる」(一七五頁)と、豪華絢爛な舞姫を前にしながら、自己の苦しみへとその思考を転じていたのであった。傍線部(カ)の「夢のやう」も、華やく宮廷の様子を醒めた視線で見つめており、(ウ)に通じる要素を含み持つといえよう。

この翌日、童女御覧の儀も行われた。着飾った童女達の様子を描写した後、以下のような文が続く。

われらを、かれがやうにて出でるよとあらば、またさてもさまよひありくばかりぞかし。かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは。されど、目にみすみすあさましきものは、人の心なりければ、今より後のおもなさは、(キ)ただなれになれずき、ひた

おもてにならむもやすしかしと、身の有様の夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とまることも例のなかりけり。

(寛弘五年十一月二十二日／一七九—一八〇頁)

童女達を自身に思いなぞらえ、傍線部(キ)「宮仕えにすっかり慣れ切ってしまい、人前で顔を見せるようなことも平気になってしまふのか、我が身の有様が夢のように思われる」といつている。(紫式部)は、出仕直後の心境を(ア)「夢路にまどはれし」と回想し、自身の置かれた空間を「夢路」と相対化し、そこで戸惑う心境を語っていたが、ここでは、宮廷生活に馴染んでしまった自身そのものを「夢のやう」と表現している。

ここで、『紫式部日記』の冒頭直後の場面に目を転じておく。

御前おまへにも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを、聞こしめしつづ、なやましようおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、(ク)憂き世のなぐさめには、かかる御前おまへをこそたづねまゐるべかりけれど、現うつし心をはひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。

(寛弘五年七月／二二三頁)

傍線部(ク)の「かかる御前おまへをこそたづねまゐる」とは、彰子のもと

での宮仕えを指しており、宮仕えの日々が「憂き世のなぐさめ」「現うつし心をはひきたがへ」「よろづ忘らるる」ものであり、(紫式部)にとつて、ふさぎ込む心境を元気づけることに繋がっていたことが読み取れる。ここに〈夢〉と対になる〈現〉の意味を含有する「現うつし心」という語を見出せるが、これについては「自己の存在する現実に対して、「憂き世」と規定し、妄執する平生の心の様^②」であるとする、小谷野純一に従いたい。

西郷信綱は、夢を籠りとの関係で捉え、「魂の働きを非日常的に活気づけ、まさに夢を乞う祭式が、聖所ごもりであった^③。」と説いた。『紫式部日記』には〈夢〉そのものが描かれる場面はないものの、傍線部(ア)(ウ)(カ)(ク)等を踏まえると、宮廷生活を〈夢〉と捉えていたかのように読み取れる。同時に、その〈夢〉に完全には同化しきれないでいる自己を冷やかに凝視するもう一つの視線を併せ持ってもいた。彰子への出仕は、魂を活性化させ、(ク)「現うつし心」を変貌させる〈夢〉の空間かとも思えたが、そう思ひかけた自分(ク)「かつはあやし」と突き放し、結局のところ、宮廷での我が身の有様は、〈夢〉ではなく、(キ)「夢のやう」に過ぎないと言ふ。とはいえ、宮中に安住の地を求められないからといって、自邸に戻ったところで、何かが救済されるわけでもなかった。

さも残ることなく思ひ知る身の憂さかな。こころみに、物語を

とりて見れど、見しやうにもおぼえず、(中略)すべて、はかなきことにおかれても、(ケ)あらぬ世に来たる心地ぞ、ここにてもうちまさり、ものあはれなりける。

(寛弘五年十一月／一七〇頁)

数日間、里下がりをした際の記述であるが、「身の憂さ」ばかりが思われ、傍線部(ケ)「あらぬ世に来たる心地」が強くなり、他ならぬ「物語」をも慰めにはならないという。我々読者が、『紫式部日記』と『源氏物語』の作者が同一人物であると意識して読むことで、ここで語られる「身の憂さ」「ものあはれ」は、より一層深刻なものとして浮かび上がる。(現)にも(夢)にも安住できないこのような心境を、高橋亨は「(現)と(夢)の二重否定」と述べたのであった。

本節での分析をまとめておく。(紫式部)は、彰子のもとでの生活が救済へとつながる(ア)「夢路」ではないかという淡い希望を抱いて出仕した。一方で、華やかな宮廷生活を満喫することで自己の救済へ進んでいこう、と素直には思えない屈折した感情をも内包しており、そのことが(ア)「夢路にまどはれし」という歌語的表現に表れていた。それが、(キ)に至り、己の「身の有様」そのものが「夢のやう」であるという思いへと変化を遂げたのである。(紫式部)は、(夢)への期待と戸惑いが交錯した「夢路にまどふ」心境

『紫式部日記』の(夢)を用いた比喻表現

から、(ウ)(カ)を含む、彰子のもとでの様々な経験を経て、「(現)と(夢)の二重否定」の境地へと至った。この絶望の深化が、(夢)を用いた比喻表現で巧みに書き分けられていることを指摘したい。次節では、このような自己認識のありようが、(紫式部)特有のものではないかという点について、他のテキストの用例との比較から検証する。

二、『紫式部日記』以外の(夢)を用いた比喻表現

本節では、『紫式部日記』以外の「夢のやう」及び「夢路にまどふ」の用例を読み解く。「夢のやう」の用例数は、『源氏物語』二十六例、『夜の寝覚』十七例、『浜松中納言物語』十六例、『とりかへばや物語』十三例、『紫式部日記』『狭衣物語』各三例、『うつほ物語』『更級日記』『堤中納言物語』『成尋阿闍梨母集』各二例、『蜻蛉日記』『落窪物語』『栄花物語』『大鏡』『重之集』『隆房集(艶詞)』各一例。これらの多くは、(A)男女関係、特に密通に関わって用いられたり、(B)死に関わって用いられたりすることが指摘できる。まず、(A)について論じる。『重之集』の詞書に「夢のやう」がある。

ある人、(コ)みやたちにゆめのやうにてやみにけるを、
「ゆめ人にしらすな」など、なくなくくちかためられけ

るを、うせたまひにければ

29 思ひいでのかなしきものは人しれぬ心のうちのわかれなり
けり¹⁵

傍線部(二)「みやたち」は「複数ではない。(中略)さる宮。さる皇女の意¹⁹」であり、秘められた逢瀬の後、その皇女が亡くなってしまい、悲しみに暮れる際の詠歌である。

また、類似の例が光源氏と藤壺の逢瀬の場面でも用いられている。いかなるをりにかありけん、あさましうて近づき参りたまへり。

(サ)心深くたばかりたまひけんことを知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。(中略)(シ)男は、うしつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明けはてにけれど出でたまはずなりぬ。

(賢木／②一〇七〜一〇八頁)²⁰

光源氏の突然の侵入に驚く藤壺の心情表現として、傍線部(サ)「夢のやう」が用いられ、光源氏も、(シ)「うつし心失せにけれ」と平静の心境ではいられない。「夢のやう」は、これらのほかにも、女三宮と柏木(若菜下／④二四三頁)、浮舟と匂宮(浮舟／⑥一八一頁)などをはじめ、様々なテキストで男女の密通に関わって用いられており、平安文学において極めて重要な意味を持つ比喩表現といえる。

一方、「夢路にまどふ」については、「夢のやう」との間に、共通する要素だけではなく、差異もあると考えられる。『古今和歌集』の用例を見てみる。

524 思ひやる境^{まかひ}はるかになりやするまどふ夢路^{ゆめぢ}に逢ふ人のな
き

(卷第十一・恋歌二)²¹

恋人のもとへと魂が移動する通路、「夢路」にいるはずなのに、うまく相手の魂と出逢えないという。『後撰和歌集』「ゆきやらぬ夢地にまどふ袂^{たもと}には天つ空なき露^{つゆ}ぞ置きける」(巻第九・恋一・559)²²も、その点ではほぼ同義であろう。男女関係という意味では、『重之集』や『源氏物語』の「夢のやう」とも共通するが、むしろ逢いたい相手に逢えずに行き詰まってしまった心境といえる。

このような「夢」と「恋」の関係は、「夢」がまだ「イメ」と呼ばれていた時代の「魂逢ひ²³」の発想が下敷きにあるといわれる。

西海道節度使判官佐伯宿禰東人が妻、夫君に贈る歌一

621 間なく恋ふれにかあらむ草枕^{くさまくら}旅なる君が夢にし見ゆる

首 佐伯宿禰東人が和ふる歌一首

622 草枕^{くさまくら}旅に久しくなりぬれば汝をこそ思へな恋ひそ我妹^{わが妹}

多田一臣は、『万葉集』巻四のこの贈答歌を引き、「相手との直接の

出逢いが妨げられている時、相手の魂との逢会を求めて魂が遊離する現象が恋である。」と説いた。『重之集』や『源氏物語』では、実際に逢っているわけであるから夢のなかでの出来事ではないのだが、二人の関係からしてまさに夢同然の出来事として語られていると読み解くべきである。

次に、(B)の例についてだが、『朝忠集』に載る、醍醐天皇崩御時の贈答歌に詠まれる「夢路にまどふ」から見ていく。

- 醍醐のみかどかくれ給ひてのころ、よしふるの宰相に
32 夢かとぞわびては思ふたまさかにとふ人ありやまたやさめぬと
かへし、宰相

- 33 あはれとも思ひぞわかぬうばたまの同じ夢路にまどふ身なれば²⁶

好古が朝忠への返歌の中で、天皇崩御の悲しみに沈む心境を「同じ夢路にまどふ身」と詠んだ。紫の上の葬送の場面でも「御送りの女房は、まして夢路にまどふ心地して」（御法／④五一―頁）と語られていた。

「夢のやう」の例も似ている。浮舟の死を聞くも、「夢とおぼえて、いとあやし」（蜻蛉／⑥二〇三頁）と、不審に思った句宮が宇治に派遣した時方に対しての、浮舟の侍従の言葉に見られる。

『紫式部日記』の〈夢〉を用いた比喩表現

「いとあさましく、思しあへぬさまにて亡³せたまひにたれば、いみじと言ふにも飽かず、夢のやうにて、誰も誰もまどひはべるよしを申させたまへ。（後略）」

侍従は、浮舟の死に接した周囲の人々は「夢のやう」に思い、一樣に「まどふ」ばかりであると述べている。

西郷信綱は、魂が身体に戻れなくなった状態が死であると説いた。死によって、魂は身体とは分離してしまうが、〈夢〉を通じて生者との交通を保つ。平安時代の人々は、この通路のことを「夢路」と捉え、それが身近な人物の死去に際して、自分達の眼前に開かれたと考えていたのではないか。その通路の先にある死を恐れて、「まどふ」ているのだと読み解いておく。

さて、ここまで、用例数が多いものを紹介したが、これらに分類しにくい例も存在する。

例えば、『買之集』の「夢路にまどふ」は、遠く離れた旅人を思う歌に詠まれている。

たび人にぬさやるとて

- 732 別れゆく人をおしむと今宵より遠き夢路に我やまどはん²⁸

(A)(B)とは異なる文脈ではあるが、「夢路」が、離れた相手との間をつなぐ、魂が通って行くための通路という点は共通している。様々

な原因で、その魂の通り道をすんなりと通過することができない状態を「夢路にまどふ」と詠むのだと理解しておくべきだろう。

また、『蜻蛉日記』における、唐崎祓の帰途の作者の心情描写は、『紫式部日記』の(キ)との関連で、興味深い。

栗田山あはたぎといふところにぞ、京よりまつ持ちて人來たる。「この

昼、殿おはしましたりつ」と言ふを聞く。いとぞあやしき、なき間まをうかがはれけるとまでぞおぼゆる。「さて」など、これかれ問ふなり。われはいとあさましうのみおぼえて來着ききぬ。

降りたれば、ここちいとせむかたなく苦しきに、とまりたりつる人々、「おはしまして、問はせたまひつれば、ありのままになむ聞こえさせつる。』などてか、この心ありつる。悪あしうも来にけるかな」となむありつる」などあるを聞くにも、(ス)夢のやうにぞおぼゆる。

(一九七—一九八頁)^②

唐崎での祓によって、魂を活性化させることができたものの、兼家來訪を知らされた作者は、唐崎祓が〈夢〉ではなく、結局は(ス)「夢のやう」なものに過ぎなかったのだ、現実を思い知らされた、と書き綴っており、ここでの「夢のやう」は、自己の心情の表現である。^③

平安時代の女性が、自身の置かれた状況を表現するのに、〈夢〉

を用いているものとして、『紫式部日記』の(キ)「身の有様の夢のやうに思ひつづけられ」の先例ともいえるが、これに酷似した例が『源氏物語』にも発見できる。

中将に姿を見られた後の、尼君の言葉に答える浮舟の発話の中にみられる。

「隔てきこゆる心もはべらねど、あやしくて生き返けるほどに、(七)よろづのこと夢のやうにたどられて、あらぬ世に生まれたる人人は、かかる心地やすらんとおぼえはべれば、今は、知るべき人世にあらんとも思ひ出でず、ひたみにこそ睦むましく思ひきこゆれ」とのたまふさまも、げに何心なくうつくしく、

(手習／⑥三二〇頁)

傍線部(七)「よろづのこと」とは、浮舟の身に起こったことの総体である。高橋亨は、「浮舟は自己の存在そのもの内に「あらぬ世」をみいだした」と読み解き、ここから読み取れるような〈女〉の存在感覚にこそ、「源氏物語の思想」が反映されていると説いた。^④

『蜻蛉日記』の(ス)と『紫式部日記』の(キ)、さらには『更級日記』の「夢のやう」について論じた村井幹子は、「夢のやう」が「作品の構造と大きくかわりあっている」点が『紫式部日記』の特徴であると述べている。^⑤ 貴重な指摘であるが、本稿では、さらに多くのテキストの用例を詳細に調査しており、それらとの比較を踏

まえて、まとめ直しておきたい。古代文学の伝統において、男女の密通を「魂逢ひ」に重ねたり、魂が身体から分離する、死という現象に関して用いられたりした「夢のやう」を、『蜻蛉日記』が祓という古代習俗との関わりで〈夢〉と〈現〉の狭間にある、自己の心情の形容として用いた。『紫式部日記』は、これを、〈夢〉や魂といった古代習俗が直接には語られていない場面でも用いた。構造的な問題というよりも、〈紫式部〉が、〈夢〉や魂などと通底する発想に基づいて、自己を認識していた点を重視したい。さらに、類似の使用法が『源氏物語』の登場人物においても指摘され、かつそれ以前の他のテキストからは発見できないことも述べた。〈夢〉と〈現〉の世界観を背景にした、わずかな救済の可能性さえも絶たれた先に生まれる厳しい自己認識に、物語作者〈紫式部〉固有の発想が垣間見えた。

おわりに

本稿で明らかにしたこととその意義について記す。まず、『紫式部日記』における〈夢〉を用いた比喩表現について分析した結果、宮中を「夢路」になぞらえ、いくばくかの救済への望みを保ちながらの苦悩というところから、自身の居場所を完全に見いだせなくなつた心境へと、〈紫式部〉が、その絶望感を深化させていることが

『紫式部日記』の〈夢〉を用いた比喩表現

分かった。このことは、『紫式部日記』の内部における、〈紫式部〉の心境変化とその表現のあり方に迫る一助になるはずである。また、同時代の他のテキストにおける用例を網羅したことで、当時の〈夢〉を用いた比喩表現の諸相を体系的に明らかにすることができた。とりわけ、『蜻蛉日記』や『紫式部日記』、『源氏物語』には、平安期の女性が自己の存在をどのように認識していたのかを探る上でも重要な用例が含まれていた。〈夢〉を用いた比喩表現は、〈夢〉や魂などの古代習俗と直接関連する文脈で用いられることが多かったが、『紫式部日記』と『源氏物語』では、それらが直接には語られていなくても、その発想を背景に持ちながら、自己の存在感覚の形容として用いていることを新たに指摘した。『紫式部日記』と『源氏物語』だけに共通する要素を見出すことで、物語作者〈紫式部〉に近づきたいという意図からであった。文学研究において、作者というものをどのように扱っていくのかという難解な問題について模索した、一つの試みでもあった。

本稿では、『紫式部日記』を中心に論を進めたが、〈紫式部〉に言及するのであれば、『源氏物語』を正面から論じることも欠かせまい。また、『紫式部日記』を論じる上でも、〈夢〉に関する表現以外にも視野に入れていく必要がある。今後の課題としたい。

注

- ① 西郷信綱『西郷信綱著作集第2巻 記紀神話・古代研究Ⅱ 古代人と夢』（二〇一二年、平凡社。初出は、『古代人と夢』一九七二年）。
- ② 河東仁『日本の夢信仰——宗教学から見た日本精神史——』（二〇〇二年、玉川大学出版部）。
- ③ 倉本一宏『平安貴族の夢分析』（二〇〇八年、吉川弘文館）。
- ④ 例えば、吉海直人『源氏物語研究ハンドブック』（一九九九年、翰林書房）の「〈夢〉関係研究文献目録」には、四十八（追加も含む）の先行論が紹介されている。
- ⑤ 『紫式部日記』の「夢のやう」に関する論考としては、高橋亨「夢のような現実感覚」（『日本文学』第二十一巻十号、一九七二年十月）、村井幹子「紫式部日記の比喩表現——『夢のやうに』をめぐって——」（『中古文学論攷』第七号、一九八六年十月）、沼田晃「『紫式部日記』の作者にとって物語とは何か——『紫式部日記』と『源氏物語』の「夢のやうに」にあるまじきこと」の表現をめぐる——」（『帝京国文学』第四号、一九九七年九月）、川名淳子「『夢のやうにもこよひのだつ』——紫式部日記における唐風装束——」（『東横国文学』第三十三号、二〇〇二年三月）がある。また、『紫式部日記』以外を対象としたものとして、拙稿「『夢のやう』の表現史——『蜻蛉日記』の場合——」（『名古屋大学国語国文学』第九十二号、二〇〇三年七月）、同「夜の寝覚」第一部の「〈夢〉と〈夢のやう〉——広沢を介在させて考える——」（『名古屋大学国語国文学』第九十六号、二〇〇五年七月）がある。
- ⑥ 例えば、陣野英則「物語作家と書写行為——『紫式部日記』の示唆するもの——」（『源氏物語の話しと表現世界』二〇〇四年、勉誠出版。初出は、『国文学研究』第二九集、一九九九年十月）、同「紫式部という物語作家——物語文学と署名——」（『源氏物語の話しと表現世界』初出は、河添房江ほか編『叢書 想像する平安文学 第8巻』二〇〇一年、勉誠出版）や、高橋亨「物語作者のテクストとしての紫式部日記」（『源氏物語の詩学』二〇〇七年、名古屋大学出版会。初出は、南波浩編『紫式部の方法』二〇〇二年、笠間書院）など。
- ⑦ 拙稿「物語作者（紫式部）への序章——『紫式部日記』と他テクスト群との語彙用例数比較——」（『同志社国文学』第七十三号、二〇一〇年十二月）。
- ⑧ 『紫式部日記』の引用は、中野幸一『新編日本古典文学全集』（一九九四年、小学館）に拠った。
- ⑨ 秋山虔「紫式部試論」（『国語と国文学』第二十五巻第九号、一九四八年九月）。
- ⑩ 例えば、高橋亨「紫式部、自己省察の文体」（『国文学』第二十三巻九号、一九七八年七月）、日向一雅「紫式部日記」論——「憂き世」意識から流離意識へ——」（平安文学論究会編『講座平安文学論究 第六輯』一九八九年、風間書房）、小谷野純一「紫式部日記」の表現機構」（伊藤博・宮崎莊平編『王朝女流文学の新展望』二〇〇三年、竹林舎）などがこの箇所に関連している。
- ⑪ 平安仮名テクストにおける「夢路にまどふ」の用例数は以下の通り。
『狭衣物語』『右大臣家歌合治承三年』各二例、『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『古今和歌集』『後撰和歌集』『貫之集』『朝忠集』『六条院宣旨集』各一例。（まどふ夢路「夢ちに我やまどはん」「夢路にまよふ」「夢の直路にまどふ」も含めた）。
- ⑫ 小谷野純一「紫式部日記」に於ける「うつし心」についての検討」（『中古文学』第十号、一九七二年十一月）。
- ⑬ 注①前掲書、三五頁。
- ⑭ 高橋亨「夢のような現実感覚」（注⑤参照）。

⑮ 大島本に則せば二十五例となるが、手習の巻に「夢の世に」という語がある。この語を、河内本・別本（陽明本・保坂本など）が「ゆめのやうに」としており、本稿ではこれを「夢のやう」の用例として算入した。

⑯ 「夢のやう」が、男女の逢瀬に関わって用いられている例は、『重之集』一例、『源氏物語』二十六例中九例、『うつほ物語』二例、『堤中納言物語』二例、『浜松中納言物語』十六例中八例、『狭衣物語』三例中一例、『夜の寝覚』十七例中九例、『とりかへばや物語』十三例中六例。また、『古今和歌集』『後撰和歌集』『狭衣物語』各一例の「夢路にまどふ」も同様である。

⑰ 「夢のやう」が、死に関わって用いられている例は、『源氏物語』二十六例中九例、『更級日記』二例、『浜松中納言物語』十六例中一例、『夜の寝覚』十七例中一例、『大鏡』一例、『成尋阿闍梨母集』二例、『朝忠集』一例、『源氏物語』一例、『夜の寝覚』一例の「夢路にまどふ」も同様。『源氏物語』における「夢のやう」が、死に関わって用いられている点については、山口仲美「源氏物語の比喩表現」（『平安文学の文体の研究』一九八四年、明治書院）に指摘がある。

⑱ 『重之集』の引用は、『私家集大成 中古Ⅰ』（一九七三年、明治書院）に拠った。

⑲ 目加田さくを『私家集全釈叢書4 源重之集・子の僧の集・重之女集』（一九八八年、風間書房）、七十五頁。

⑳ 『源氏物語』の引用は、阿部秋生・秋山慶・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集』（一九九四〜九八年、小学館）に拠った。○数字が巻号を表す。

㉑ 『古今和歌集』の引用は、小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系』（一九八九年、岩波書店）に拠った。

㉒ 『後撰和歌集』の引用は、片桐洋一『新日本古典文学大系』（一九九〇

『紫式部日記』の「夢」を用いた比喩表現

年、岩波書店）に拠った。

㉓ 「魂逐ひ」については、大久間喜一郎「恋と夢」（『国文学 解釈と鑑賞』第三十六卷第十一号、一九七一年十月、河東仁「上代の夢信仰（二）——『万葉集』の夢歌」（注②前掲書）などに詳しい。

㉔ 『万葉集』の引用は、小島憲之・東野治之・木下正俊『新編日本古典文学全集』（一九九四年、小学館）に拠った。

㉕ 多田一臣「古代の夢——『日本霊異記』を中心に」（『文学』隔月刊、第六卷第五号、二〇〇五年九月）。

㉖ 『朝忠集』の引用は、『私家集大成 中古Ⅰ』（一九七三年、明治書院）所収のⅠ系統（伝源道濟筆小堀本）を底本にしたが、返歌の第二句「思ひそぬ（本ま、）」とあったものを、Ⅱ系統（西本願寺本）によって、「思ひそわかぬ」と校訂した。

㉗ 注①前掲書、三十五頁。

㉘ 『貫之集』の引用は、『私家集大成 中古Ⅰ』（一九七三年、明治書院）所収のⅠ系統（正保版本「歌仙家集」）に拠った。

㉙ 「蜻蛉日記」の引用は、木村正中・伊牟田経久『新編日本古典文学全集』（一九九五年、小学館）に拠った。

㉚ 拙稿「夢のやう」の表現史——『蜻蛉日記』の場合——」（注⑤参照）。

㉛ 高橋亨「存在感覚の思想——（浮舟）について——」（『源氏物語の対位法』一九八二年、東京大学出版会。初出は、『日本文学』第二十四卷十一号、一九七五年十一月）。

㉜ 村井幹子「紫式部日記の比喩表現——「夢のやうに」をめぐる——」（注⑤参照）。

㉝ 沼田晃一は、これを「古代の思想から逸脱」（注⑤参照）とするが、本稿では、むしろ古代習俗との連続性を重視してその比喩表現を読み解

『紫式部日記』の〈夢〉を用いた比喩表現

いてきた。

※本文引用については、注記した出典によるが、引用に際して本文を改めた箇所がある。また、用例数の検索については、『新日本古典文学大系 源氏物語索引』、国文学研究資料館のデータベース、『新編国歌大観』CD-ROMを用いた。ただし、『狭衣物語』（新潮日本古典集成）、『とりかへばや物語』（新日本古典文学大系）については、索引を用いずに用例数を数えた。

〔付記〕 本稿は、平成二十三年度中古文学会春季大会（平成二十三年五月

二十九日、於・日本女子大学）における口頭発表をもとにしています。席上、ご教示くださった方々に御礼申し上げます。